

# 児童用の簡易版セルフ・エスティーム（SE）潜在連合テストの開発の構想

— 自律的ならびに他律的 SE を同時に測定する，紙筆版とタブレット PC 版の測定法開発に関する理論 —

Considerations on the Development for Brief Self-Esteem Implicit Association Test for Children:  
Theoretical Perspectives Toward Developing Implicit Association Test for Autonomous and Heteronomous Self-Esteem

横嶋 敬行，賀屋 育子，内田香奈子，山崎 勝之

YOKOSHIMA Takayuki, KAYA Ikuko, UCHIDA Kanako and YAMASAKI Katsuyuki

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 33 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.33, Feb., 2019

## 児童用の簡易版セルフ・エスティーム (SE) 潜在連合テストの開発の構想

— 自律的ならびに他律的 SE を同時に測定する, 紙筆版とタブレット PC 版の測定法開発に関する理論 —

### Considerations on the Development for Brief Self-Esteem Implicit Association Test for Children:

Theoretical Perspectives Toward Developing Implicit Association Test for Autonomous and Heteronomous Self-Esteem

横嶋 敬行\*, 賀屋 育子\*\*, 内田香奈子\*, 山崎 勝之\*

\*鳴門教育大学大学院人間形成コース

\*\*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

YOKOSHIMA Takayuki\*, KAYA Ikuko\*\*, UCHIDA Kanako\* and YAMASAKI Katsuyuki\*

\* Department of Human Development, Naruto University of Education

\*\* Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education

**抄録:** 本論文では, 自律的 SE と他律的 SE を同時に測定することができる, 紙筆版およびタブレット PC 版の簡易版 SE 潜在連合テスト (SE-IAT) の開発に関する理論を提示することを目的としている。第 1 節では, 本研究の背景として, 近年の SE 研究の動向と自律的 SE および他律的 SE の概念と測定方法論について提示している。第 2 節では, 現行の自律的 SE の測定法の理論について言及している。そして, 第 3 節では自律的 SE と他律的 SE を同時測定する山崎ら (印刷中) の理論を紹介しながら, それを児童用の簡易版 SE-IAT で作成する構想をまとめている。

**キーワード:** 自律的セルフ・エスティーム, 他律的セルフ・エスティーム, 簡易版潜在連合テスト

**Abstract:** The present paper aimed to depict the theoretical perspectives of developing Implicit Association Test (IAT) to measure autonomous and heteronomous self-esteem for children. The theory applies for two types of IAT, a paper-and-pencil version and a tablet PC version. In the first section, the back grounds of the present study were illustrated, which concerned trends of self-esteem research in recent years, concepts of autonomous self-esteem and heteronomous self-esteem, and measuring methods of these two self-esteem. In the second section, the current theory of measuring autonomous self-esteem was mentioned. Finally, followed by that, considerations on developing brief IAT for measuring both autonomous and heteronomous self-esteem were discussed, along with the theories clarified by Yamasaki et al. (in press).

**Keywords:** autonomous self-esteem, heteronomous self-esteem, brief implicit association test

#### 1. セルフ・エスティームの研究と教育の潮流

セルフ・エスティーム (Self-Esteem: SE) は, 日本では自尊感情や自尊心, 自己肯定感の訳語で知られている。1969年に出版された Branden の書籍では人生の成功の鍵を握るといふ記述もあり, 1980年代のアメリカでは SE 運動と呼ばれる社会現象に発展するほどの注目を集めた (cf. Branden, 1992; Zeigler-Hill, 2013)。例えば, アメリカのカリフォルニア州では, 学業成績を向上させ反社会的行動を減少させる「社会的ワクチン」と位置づけ, 教育に導入するプロジェクトも実施されている (Mecca, Smelser, & Vasconcellos, 1989)。現在の日本の教育界でも SE への注目度は高く, 中央教育審議会 (2016) では, 児童の健康や適応を高めるために学校教育で育むべき心的特性として明記されており, 東京都教育委員会におい

ても平成 20 年度から 5 ヶ年計画で「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」に関する研究が進められている (東京都教育委員会, 2016)。

一方で, 研究界では SE の効用に賛否両論の知見がある。中でも, Baumeister Campbell, Krueger, & Vohs (2003) による SE の効用への批判的な主張は, 当時の SE に関する大規模なレビューに裏付けされており, インパクトの強いものである。そうした賛否両論の議論を紐解く研究として, SE の適応的側面の概念を再定義する試みと, 不適応的な SE が形成される要因の追求も進んでいる。例えば, 適応的側面の概念は真の SE (true self-esteem, Deci & Ryan, 1995) や最適な SE (optimal self-esteem, Kernis, 2003), 不適応的側面の概念は随伴性 SE (contingent self-esteem, Deci & Ryan, 1995) や脆く高い SE (fragile high self-esteem, Kernis, 2003) と概念化されている。Kernis が編集

を務めた2006年出版の『Self-Esteem: Issues and Answers』の書籍では、上記の理論をはじめ、当時のSE研究の諸課題とその回答について多くの研究者の知見がまとめられている。

しかしながら、SEの育成教育に目を向けると、現在においてもその実施には慎重な姿勢が必要であると考えられる。Baumeister, Smart, & Boden (1996)は、SEの概念にある自己に対する「肯定的」な評価の基本的意味には、誇り、利己主義、傲慢、名誉、うぬぼれ、自己愛、優越感などが含まれると述べている。そして、SEを高めようとする安易な試み（見境なくほめるなど）はナルシズムなど不適応的な心的特性を促進させかねないと警鐘が鳴らされている（Baumeister et al., 2003）。また、Deci & Ryan (1995)では、人の価値は絶えず問われ続けるものでもなければ、自己評価のプロセスに縛られ続けるものでもなく、自分の価値に意識を向けているということ自体が、本物(true)ではなく随伴したSEであると論じている。つまり、概念上でSEの適応的側面と不適応的側面を弁別できたとしても、SEの育成教育は意図せずに不適応的心的特性を高めてしまう危険性が懸念される。そのため、上記のような疑義が未解決のまま教育のなかで広く取り扱われている現状は危惧するべき状態であると考えられる。現代では、教育にもエビデンスを求める議論があるが、特にSEの育成教育に関して言えば、SEの両側面に対する教育の効果を科学的に検証する必要性が高いと考えられる。

そこで重要になるのが、SEの適応的側面と不適応的側面を弁別的に定量化できる測定方法である。例えば、SEの測定法ではRosenberg (1965)の尺度(Rosenberg Self-Esteem Scale: RSES)が世界的に広く使用されている(e.g., Schmitt & Allik, 2005)。RSESはgood enoughの感覚で表現されるような適応的なSEを測定することを目的として作成している。しかしながら、近年の研究において、RSESはSEの適応的側面と不適応的側面を混在して測定していることが明らかにされており(Kernis, Granneman, & Barclary, 1989; 伊藤・川崎・小玉, 2011)、SEの両側面を弁別した研究や適応的なSEに特化した教育の効果検証に用いることは難しい。こうした現代のSE研究・教育の諸課題を背景に、近年では山崎・横嶋・内田(2017)によって、新しいSEの概念提起とともに、測定法の方法論の精緻化が行われている。

## II. 自律的および他律的SEの概念理論

山崎他(2017)ではSEの適応的側面を自律的SE(autonomous self-esteem)、不適応的側面を他律的SE(heteronomous self-esteem)と提起している。自律的SEは自己信頼心(self-confidence)、他者信頼心(confidence

in others)、内発的動機づけ(intrinsic motivation)が一体となって高まることで形成されるという特徴を持ち、健康や適応を高める望ましいSEであると論じられている。一方で他律的SEは、これらの要素が揃って低下し、健康や適応を阻害するSEと定義されている。そして、測定法に関しては、他律的SEは意識レベルの反応過程によってその特徴をある程度捉えることができると論じられているもの(山崎・横嶋・賀屋・山口・内田, 2018)、自律的SEは意識レベルでは測定できず、非意識レベルの反応過程による測定方法を用いる必要があると論じられている。そして、近年では以下のような実証研究からも、適応的なSEを非意識レベルで測定する必要性がうかがえる。

Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll (2003)の研究では、意識レベルのSEをRSESによって測定し、非意識レベルのSEを潜在連合テスト(Implicit Association Test: IAT, Greenwald & Banaji, 1995)によって測定することで、両SEと不適応的心的特性との関連を検討している。そこではまず、RSESとSE-IATが必ずしも一致しない(関連しない)ことが示されており、その要因は両測定法が異なる認知プロセスを利用してSEを測定していることに起因すると論じられている(e.g., Jordan, Spencer, Zanna, et al., 2003; Zeigler-Hill, 2006)。また、RSES得点が高い者の中でも、SE-IAT得点が低い者の方がナルシズム(narcissism)や内集団バイアス(in-group bias)が高くなることが明らかにされている(Jordan, Spencer, Zanna et al., 2003)。そして、SE-IAT得点の低い者は、学業成績や外見、他人の承認、競争などの外的要因に自己の価値が随伴しており(Jordan, Spencer, & Zanna, 2003)、状態的なSE(RSES)が不安定であることも報告されている(Zeigler-Hill, 2006)。

さらに、脳機能イメージングの研究からはSE-IATとRSESは自己への肯定的な感覚の異なる側面を測定している可能性が示されている。Izuma, Kennedy, Fitzjohn, Sedikides, & Shibata (2018)の研究では、自己の顔の受動的な視聴時に活性化する報酬関連の脳領域(reward-related brain regions)の神経活性パターンと、SE-IATおよびRSES得点の関連を検討している。報酬関連の脳領域とは、例えば生命の維持のために欠かせない水や食べ物など、人間にとって報酬(reward)になり得るものを意味づける脳内の情報処理過程であり、脳内で報酬として意味づけられた刺激は、動物自身に快感を生じさせたり、学習の強化因子となったり、意思決定や目的志向的行動(goal-directed behavior)における情報基盤を担うと考えられている(筒井・渡邊, 2008)。Izuma et al.(2018)では、自己(the self)に関する最も明白で直接的な表象である自己の顔に対する報酬関連の脳領域の反応と、SE測定法の関連を明らかにすることで、脳神経の反応から

SE 測定法の妥当性を検討している。そして、そこでの報酬系の領域の賦活は SE-IAT 得点と関連する一方で、RSES と関連を示さないことが明らかにされている。また、自己処理 (self-processing) に関する脳領域とは SE-IAT および RSES の両者が関連していると報告されているが、SE-IAT と RSES が無相関であることから ( $r = -.07, p = .63$ ), 異なる関係性がある可能性も示唆されている。

Jordan, Spencer, Zanna et al. (2003) などの知見からは RSES で測定される高い SE が必ずしも適応的ではなく、SE-IAT で測定される非意識レベルの SE が適応的な性質を捉えている可能性を示唆している。また、Izuma et al. (2018) の研究からは、SE-IAT が自己の顔に対する報酬関連の脳領域の賦活と関連していることが示されたが、心理学的な観点で考察すると、SE-IAT が非意識レベルにある自己に対する肯定的な感覚の源泉を捉えているという解釈も考えられる。神経科学の知見と心理学的理論の接合には慎重な姿勢が必要ではあるが、これらの知見は適応的な自律的 SE を非意識レベルで測定する必要があるという山崎他 (2017) の理論の実証的知見の 1 つと推測することもできる。

現在では、これらの理論を基盤として、横嶋・内山・内田・山崎 (2017) が潜在連合テストの方法を用いた児童用の紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テスト (the paper and pencil version of Self-Esteem Implicit Association Test for Children: SE-IAT-C) を開発し、賀屋・山口・横嶋・内田・山崎 (2018) が質問紙法を用いた児童用の他律的セルフ・エスティーム尺度 (Heteronomous Self-Esteem Scale for Children: HSES-C) を開発し、信頼性と妥当性の検討を行っている。また、作成された測定法を用いた教育効果の検討によって自律的 SE を育む教育方法に関する研究も進み、効果的な教育プログラムが発表されている (e.g., Yamasaki, Michishita, Yokoshima, Kaya, & Uchida, 2018; 横嶋・賀屋・内田・山崎, 2018)。

一方で、既存の測定法にも課題があり、山崎・横嶋・賀屋・内田 (印刷中) では、その課題を次のように指摘している。まず、他律的 SE の測定に関しては、意識レベルでもある程度捉えることができると論じられているが (山崎・横嶋他, 2018), 自記式の質問紙は社会的望ましき (social desirability) などの歪曲要因がかかることが課題になる。そして、先述の教育効果の検証のように、自律的 SE と他律的 SE を同じ研究で比較する場合には、測定法の方法論が異なることによって、方法論の違いから起こる差が結果に混入することが問題として指摘されている。次に、自律的 SE の測定法に関しては、横嶋他 (2017) の SE-IAT-C が自己への快あるいは不快の潜在連合を中心的に測定する構成であることから、自律的 SE の構成要素である他者信頼心の測定の程度が明確にされ

ていないことが課題として指摘されている (山崎他, 印刷中)。加えて、SE-IAT-C は冊子の作成や採点、調査の実施に多くの時間的コストがかかることも課題である。その対策としてカウンターバランスの削減案などが出されているものの (横嶋・山口・賀屋・内田・山崎, 2018), 今後の研究や学校現場での実用を視野に入れると、更なる改善が望まれる。

以上のような研究を背景にもち、本論文では、山崎他 (印刷中) が提示する自律的 SE と他律的 SE を同時に測定する方法論の一部を紹介しながら、児童用の簡易版の測定法の開発構想を提示することが趣旨となっている。

### III. 現行の自律的 SE 測定法の理論

新規の測定法の理論に入る前に、IAT の基本的な説明と現行の自律的 SE の測定法の構成から提示したい。IAT は主に PC 版と紙筆版で開発されている。ここでは、測定したい概念に関する 2 種類の刺激 (カテゴリー刺激) と、快 (pleasant) および不快 (unpleasant) の 2 種類の刺激 (属性刺激) の計 4 種類からなる複数刺激が提示され (PC 版ならモニターに 1 つずつ提示され、紙筆版なら紙面上に刺激が並んでいる)、指定された組み合わせに従って刺激を左右に分類する作業を行い、その際の反応速度 (PC 版) や課題の遂行量 (紙筆版) を測定することで潜在的態度 (implicit attitude) を測定する。例えば、既存の SE-IAT では、カテゴリー刺激に自己と他者が設定される場合が多い (Greenwald & Farnham, 2000)。その得点化 (紙筆版) を例に挙げると、「自己と快」および「他者と不快」を左右に分類する課題の作業量から、「自己と不快」および「他者と快」を左右に分類する課題の作業量を減算することで得点化される。PC 版は D スコアと呼ばれる得点化の算出法がある。

しかしながら、自己と他者を対とした IAT は、得点に他者に対する潜在的態度が反映されることが明らかになっており (Karpinski, 2004), 自己に対して肯定的で他者に対して否定的な潜在的態度を持つ者ほど得点が高くなり、自己に対して否定的で他者に対して肯定的な態度を持つ者ほど得点が低くなる構成になっている。小塩・西野・速水 (2009) で、このタイプの SE-IAT と他者軽視との間に弱い正の相関 ( $r = .21, p < .05$ ) がみられていることから、自己と他者との相対的な潜在的態度の差、つまりは他者比較的な潜在的 SE が測定されていると考えられる。そのため、横嶋他 (2017) では他者刺激から来る影響を軽減するために、他者語の代わりに多くの人にとって快でも不快でもない中庸の印象を持つと考えられる指示語 (e.g., あれは、それは) を用いる方法 (cf., Jordan, Spencer, Zanna, et al., 2003) を採用し、自己に対する快および不快の潜在連合に焦点化して測定すること

を試みている。また、属性刺激に関しては、より SE を直接的に表現する感情刺激を選択している (e.g., すきだ, まんぞくした, きらいだ, やくにたたない, など)。

このように、現行の SE-IAT-C は自己に対する快あるいは不快の潜在連合を中心とする構成となっているが、そこには一定の他者信頼心が反映されていると想定されている。山崎・内田・横嶋・賀屋・道下 (2018) では、自律的 SE の形成過程に関する言及が行われており、その主要な形成過程である幼児期 (生後 2 年間程度) の子どもと養育者の関係性のなかで自己信頼心と他者信頼心は密接に連動しながら形成されていく道筋が論じられている。また、Bowlby のアタッチメント理論においても、子どもの反応に対して母親が適切な応答を示すケースが多い場合は、子どもは母親を安定した (secure) 対象として内在化し、そうした安定した対応を受ける自己を価値ある存在、愛されている存在、助けるに値する存在として信頼する心が形成されると論じられており (Bowlby, 1982), こうして幼少期に形成される愛着のモデルを内的作業モデル (internal working model) として提唱している (Bowlby, 1973)。他にも、古くは Cooley (1902) の鏡映的自己論などでも、自己像の形成には他者からフィードバックが強く影響することが論じられている。

さらに、SE-IAT-C の妥当性の結果からも、得点の高さが他者信頼心の高さを一定レベル捉えている可能性が示唆される。横嶋他 (2017) では、自律的 SE の高低に起因する児童の行動特徴 (自律性, 不安, 攻撃性) をクラス担任の教員が評定する他者評定法を用いて SE-IAT-C の妥当性の検討を行っている。その評定項目に着目すると、自律性は「まわりに流されず、やりたいことを楽しそうにやっていることが多い (補足説明: 1 人であっても、友だちといっても、主体的に自分のやりたいことができている)」、不安は「友だちや先生の目を気にすることが多い (補足説明: 不安な感情から周囲の目を気にしやすいかどうか)」、攻撃性は「友だちに対して、気分を害することが良くある (補足説明: 友だちに対する嫌悪や怒りなど、攻撃的な気持ちを抱きやすいかどうか)」となっている。評定の結果、SE-IAT-C 得点の高い者ほど自律性に関する行動特徴が多いと評定され、不安や攻撃性に関する行動特徴が少ないと評定されており、自律的 SE の測定法としての妥当性が示されている。評定項目からも分かるとおり、それぞれの行動特徴はすべて他者との一定の関係性が考慮されており、行動の生起には他者信頼心からの影響が考えられることから、SE-IAT-C の得点の高低には一定の他者信頼心の高低が付随していると予想される。

しかし、SE-IAT-C の得点に対してより直接的に他者信頼心を反映するためには何らかの形で他者刺激を用いることが望ましい。先述の通り、教育に科学を導入する場

合、特に心理学では測定法の理論と妥当性が重要なウエイトを占める。自律的 SE の測定法として活用していくためには、他者信頼心の測定に関する課題の克服が重要な意味を持つと考えられる。こうした課題に対して山崎他 (印刷中) では、自己と他者を同一カテゴリーに含めた SE-IAT の構想を提示している。

#### IV. 自律的 SE と他律的 SE の同時測定の理論と方法

山崎他 (印刷中) が考案する SE-IAT は、横嶋他 (2017) の SE-IAT-C の属性語の設定はそのままに、カテゴリー語を「自己と他者」vs「指示語」の構成に変更するという考え方である (表 1)。この方法を用いた場合、測定法の得点の高さは潜在的な自己信頼心と他者信頼心の高さを表し、得点の低さは両心的特性の低さを表すことになる。得点が増加するベクトルは自律的 SE をよりの確に捉えると予想される。また、他律的 SE は自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけが揃って低下することによって形成されると論じられており、自律的 SE と他律的 SE は理論的に次元上に表される SE であると考えられていることから (山崎他, 2017), 得点が減少するベクトルは他律的 SE を捉えることができると考えられる。また、山崎他 (印刷中) では、この方法によって測定される心的特性を自律的 SE と他律的 SE, ナルシズム, 劣等感の 4 概念からの整理も行っている。そこでは、得点の高群に自律的 SE, 低群に他律的 SE を捉えることができると示されており、それがこの方法論の利点になる。一方で、中間得点はナルシズム (自己信頼心が高く他者信頼心が低い) と、劣等感 (自己信頼心が低く他者信頼心が高い) を混在して捉えてしまうことが予想されており、中間得点に対して積極的に意味づけを行うことができないことが欠点であると示されている。しかし、中間得点への他の心的特性の混在は多くの心理測定法に共通した課題でもあることから、こうした課題を明確に示しつつ、研究目的に対する利点を優先的に選択し、開発にのぞむことが重要であると考えられる。

また、具体的な刺激語の設定についても、山崎他 (印刷中) で提示されている。そこでは、横嶋他 (2017) の現行の SE-IAT-C の刺激語構成のうち、「自己」に関する刺激の一部と、「指示語」の刺激、快および不快の感情刺

表 1. 自律的ならびに他律的 SE を同時に測定する SE-IAT の刺激語の構成

カテゴリー語		属性語	
自分と友だち	その他	快語	不快語
じぶんは	あれは	すきだ	きらいだ
ともだちは	それは	すばらしい	くだらない
		じしんがある	ふあんだ
		まんぞくした	やくにたたない

激はそのまま活用できると示されている。一方で、他者信頼心の高低を特徴づけることになる、「自己」の刺激とともに用いられる「他者」の刺激の設定が、ここでは最も重要な位置づけになる。

自律的SEの形成過程を考慮すると、その初期段階で形成される他者信頼心は母親や父親、家族といった自分にとって非常に身近な存在になる。また、発達段階が進むにつれて他者信頼心の対象は拡大し、児童期には家族の他にも教師（担任）や友だち（主に学級内）がその形成に大きな影響を与える第1次集団（primary group, Cooley, 1902）になると考えられる。そのため、児童期の自律的SEの形成要因を考えると、「家族」「教師」「友だち」の刺激が候補に挙がる。この3つの刺激のなかでも、特に「友だち」の刺激の役割に着目したい。児童期における友だち（特に学級内の友だち）は、お互いの成長を支え合い、喜び合う仲間であると同時に、現代の学校教育においては、時には運動や勉強を競い合うライバルになる。そのため、例えば、幼児期に他律的SEが高まっているケースを考えると、友だちはしばしば自己への肯定的感覚を感じるための比較対象になってしまうことが予想され、比較対象になる度に否定的に捉えてしまうという道筋が考えられる。一方で、幼児期に自律的SEが高まっているケースを考えると、多少の競争原理が働く学校教育のなかであっても、担任教員の指導や支えがあるという点も考慮すれば、切磋琢磨という形で自他を認め合い、受け入れる関係性に発展する可能性が考えられる。しかし、指導的立場の担任教員の適切な支えがなければ、幼児期に培われた自律的SEは、比較・競争の原理のなかで低下していく道筋があることも付記しておきたい。こうした発達のプロセスを考慮すると、友だちへの他者信頼心を測定することが特に他律的SEの高さを特徴づける要因になると考えられる。「自分」と「友だち」という2種類の混合カテゴリーを設定し、得点が高まるベクトルで自律的SEを捉え、得点が低くなるベクトルで他律的SEを捉える測定法の作成が可能になると考えられる。

以上のような観点を持って、自律的SEと他律的SEを同時測定するIATの刺激語の構成は試案されている。そして、次に検討しなければならないのは調査実施にかかるコスト面の削減である。

## V. 児童用の簡易版 SE-IAT の構想

現行のSE-IAT-Cでは、冊子の作成や採点に時間的コストが多くかかることが課題であった（横嶋・山口他, 2018）。具体的には、全7ブロックからなるIAT課題が、児童の理解度を高めるための説明ページなども含めて、全32ページからなる冊子状で構成されている。調査後は得点化に使う全4ブロックの採点を行い、得点化の計算をしなければならない。調査にもおよそ15～20分程度の時間がかかるため、現代の多忙な学校現場の状況を考えると調査時間の短縮も改善事案になる。こうした全般的な時間的コストを削減するためには、第1にIAT課題のブロック数を減らした簡易版として改良することが考えられる。第2に冊子の作成や採点にかかる時間的コストに関しては、PC版を作成することで大幅な改善が望めると考えられる。

第1の簡易版のIATの構想は先行研究でも扱われている。Sriram & Greenwald (2009)の研究では、The Brief Implicit Association Test (BIAT)の名称で開発されている。そこでは、刺激の基本的な構成（4種類の刺激）はそのままに、練習課題を削除し、本番課題（4種類の刺激を組み合わせた課題）のみを扱った全4ブロックの構成のIATを考案している。BIATのように練習課題を除外すると、IAT課題に慣れないために起こる反応速度の遅延やエラー率の増加が懸念されることが課題になる。この点について、BIATは2つの刺激に注目させる指示によって調整を行っており、一部のIATでは再検査信頼性が確認されている。しかし、IATの種類によっては十分な信頼性が確認されなかったことも同論文内で明らかにされており、SE-IATは扱われていなかったことや、紙筆版ではこの方法の適用が難しいことから、独自に信頼性を向上させる方法を考案することが必要になると考えられる。またSriram & Greenwald (2009)の方法では、ブロック1とブロック3、ブロック2とブロック4がそれぞれ同じ分類課題となっているが、児童が実施することを考慮すると交互に異なる課題を行うだけで単純に分類方向を間違えてしまうことや、やり方への理解不足からエラーが増加することも予想される。こうした点に配慮し、表2のような構成での簡易版を考案した。

まず、ブロック1では「その他（指示語）+快」vs「自

表2. 児童用の自律的および他律的SEの簡易版SE-IATの手続き

課題	種類	(左側への分類) vs (右側への分類)	時間
1	練習	(その他+快語) vs (自分と友だち+不快語)	制限時間なし(8試行)
2	本番	(その他+快語) vs (自分と友だち+不快語)	30秒
3	練習	(自分と友だち+快語) vs (その他+不快語)	制限時間なし(8試行)
4	本番	(自分と友だち+快語) vs (その他+不快語)	30秒

分と友だち＋不快」の組み合わせに対して、制限時間を設けずに一定数の刺激語の分類する練習課題を行う。ブロック2では、ブロック1と同様の組み合わせに対して制限時間(30秒程度)を設けた本番課題を行う。ブロック3では、「自分と友だち＋快」vs「その他＋不快」の組み合わせに対して、同様に制限時間を設けずに一定数の刺激語を分類する練習課題を行う。ブロック4では、ブロック3と同様の組み合わせに対して制限時間(30秒程度)を設けた本番課題を行う。制限時間が横嶋他(2017)の20秒から30秒に伸びているのは、実際の調査時の児童の感想(もっとやりたかったという意見が散見された)に基づいて、児童のモチベーションを維持することを目的として、測定に支障がでない範囲に留意しながら制限時間の増加を採用した。また、各ブロックは以下のような意図を持つ。制限時間を設けていないブロック1とブロック3は、認知的負荷を軽減した状態で、IATのやり方を体験的に理解させ、適度に慣れさせることで、次に行われる本番課題のエラーを軽減するという理由から設定された。ブロック2とブロック4は通常のSE-IAT-Cの本番課題と同様に制限時間を設定して潜在連合の測定を行い、このブロックの作業量を用いて得点化を行う。この方法で留意しなければならないのは、やはり信頼性である。再検査信頼性はもちろんだが、課題慣れによって潜在連合が正しく測定できない可能性も考えられるため、十分な信頼性の検討が求められる。

次に、第2の改善案であるPC版の作成に関しては、これにより各ブロックの作業量やエラー数のカウント、得点化処理を自動で行うことができるようになる。しかし、PC版は個別検査の形式となるため、クラス集団などへの一斉実施に不向きであるという点が欠点である。特に児童の場合、課題を早く終えた児童が検査中の児童に声をかけたり、覗き込んだり、私語が増えて統制が乱れてしまうことが予想され、正確な検査を妨げてしまう可能性が懸念される。この点において、すべての児童が一律で課題を進めることができる紙筆版の形式が一斉実施に適している。そこで、先行研究のPC版の構成を採用するのではなく、紙筆版をPC版で再現することで、多集団に対して一斉実施が可能なPC版のSE-IATが作成できると考えられる。この点については、タブレットPC版で紙筆版SE-IAT-Cの測定法を再現する予備的研究や(横嶋・大上・山崎, 2018)、妥当性と信頼性の確認も行われている(横嶋・大上・賀屋・山崎, 投稿中)。タブレットPC版における簡易版の構成も先述と同様の構成で作成できると予想される。しかしながら、Sriram & Greenwald (2009)の研究が示すように、IATの測定における認知的負荷の調整は非常にデリケートなものであり、紙筆版と同じ方法を再現すると言っても、媒体や刺激の提示方法がやや異なるタブレットPC版では、想定されな

い認知的負荷の増減によって正確な測定が行えない可能性が十分に考えられる。新規の測定法の開発には予備研究も含めて信頼性と妥当性の慎重な検討が求められる。

## VI. 今後の研究の展開

以上のように、本論文では自律的SEおよび他律的SEを同時測定する方法論と、紙筆版およびタブレットPC版の児童用簡易版SE-IAT-Cの構想を提示してきた。

自律的SEと他律的SEの同時測定の理論は、現行のSE-IAT-Cの課題を改善し、よりの確に適応的SEと不適応的SEを測り分ける測定法になることが見込める。それが単一の測定法で可能になることも利点であり、完成すれば基礎研究や教育効果の検討への応用が期待される。一方で、その妥当性の検討は慎重に行われなければならない。妥当性の検討方法には、1つは現行のSE-IAT-Cとの基準関連妥当性を確認することが重要になる。また、横嶋他(2017)が実施した担任教員による児童評定法も候補にあがるだろう。その際には、自律的SEおよび他律的SEの両概念に起因する行動特徴を指標化し、評定結果と測定法の得点との関連を見ることになるため、概念の妥当性の証明に至る適切な行動特徴の理論と指標が必要になると考えられる。

また、この方法を簡易版の形式で紙筆版およびタブレットPC版の両方で揃えることができれば、用途に応じた活用が可能になると考えられる。山崎他(印刷中)においても言及されているが、タブレットPC版の利点は、冊子作成の必要がないことや、得点化を自動で行えることと、タブレット操作そのものが児童の興味を引くため、調査に対する動機づけを高く保つことである。しかし、タブレットを児童数そろえなければならないことを考えると、購入が必要になる場合は経費がかかることが難点である。この点で、紙筆版は費用的コストが少なく済む点が大きな利点である。また、現行のSE-IAT-Cと比較すると簡易版の冊子の作成や採点は、比較的短時間で済むことが予想できるため、紙筆版においても実用性の向上が期待できる。さらに、両測定法とも、実施時間はおよそ5分程度であると予想されるため、現在の学校環境にも導入しやすい方法になると期待される。

自律的SEおよび他律的SEの研究・教育に関しては、これまでの研究で一定の成果を得ることができている。特に、自律的SEを伸ばし、他律的SEを低減する効果が確認された自律的SEの育成プログラムや(Yamasaki, Michishita, Yokoshima, Kaya, & Uchida, 2018)、そのプログラム作成の基盤となっている理論は(山崎・内田他, 2018)、今後、多くの学校に浸透していくことが期待される。また、これまで、RSESなどの質問紙法による教育効果の検証で成果を挙げるのがなかった教育の中に

は、自律的SEの育成を叶える教育実践が存在していたかもしれない。SEの育成教育は科学的な検証の必要性が高いものであるが、多くの学校がその教育を高める試みに積極的に取り組むことができるように、実用性の高い測定法の開発を進めていきたい。

## 引用文献

- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss, Vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. II: Separation, anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Branden, N. (1969). *The psychology of self-esteem: A revolutionary approach to self-understanding that launched a new era in modern psychology*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Branden, N. (1992). *The power of self-esteem: An inspiring look at our most important psychological resource*. Deerfield Beach, FL: Health Communications, Inc.
- Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: C. Scribner's sons.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp.31-46). New York: Plenum.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 1022-1038.
- 伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 (2011). 自尊感情の3様態－自尊源の随伴性と充足感からの整理－ 心理学研究, 81, 560 - 568.
- Izuma, K., Kennedy, K., Fitzjohn, A., Sedikides, C., & Shibata, K. (2018). Neural activity in the reward-related brain regions predicts implicit self-esteem: A novel validity test of psychological measures using neuroimaging. *Journal of Personality and Social Psychology*, 114, 343-357.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. (2003). "I love me ... I love me not": Implicit self-esteem explicit self-esteem, and defensiveness. In S. J. Spencer, S. Fein, M. P. Zanna, & J. M. Olson (Eds.), *Motivated social cognition: The Ontario symposium* (Vol. 9, pp. 117-145). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969-978.
- Karpinski, A. (2004). A Measuring self-esteem using the implicit association test: The role of the other. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 22-34.
- 賀屋育子・山口悟史・横嶋敬行・内田香奈子・山崎勝之 (2018). 児童用の他律的(随伴性)セルフ・エスティーム尺度の開発一尺度の信頼性と妥当性の検討, そして教育への適用の考察一 教育実践学論集, 19, 1 - 12.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological inquiry*, 14, 1-26.
- Kernis, M. H. (2006). *Self-esteem: Issues and answers*. New York: Psychology Press.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclary, L. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1013-1022.
- Mecca, A. M, Smelser, N. J., & Vasconcellos, J. (1989). *The social importance of self-esteem*. Berkeley: University of California Press.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250 - 260.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Schmitt, D. P., & Allik, J. (2005). Simultaneous administration of the Rosenberg self-esteem scale in 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 623-642.
- Sriram, N., & Greenwald, A. G. (2009). The brief implicit association test. *Experimental Psychology*, 56, 283-294.
- 筒井健一郎・渡邊正孝 (2008). 報酬の脳内表現 生理心理学と精神生理学, 26, 5 - 16.
- Yamasaki, K., Michishita, N., Yokoshima, T., Kaya, I., & Uchida, K. (2018). Effectiveness of a school-based universal prevention program for enhancing autonomous self-esteem at elementary schools: Utilizing a newly developed implicit association test and questionnaire. *Paper presented in the 5<sup>th</sup> International Academic*

*Conference on Social Sciences, Sydney, Australia.*

- 山崎勝之・内田香奈子・横嶋敬行・賀屋育子・道下直矢  
(2018). 「自律的セルフ・エスティーム」を育成する  
ユニバーサル学校予防教育の教育目標の確立と授業方  
法の開発方針, 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 32, 91  
- 100.
- 山崎勝之・横嶋敬行・賀屋育子・山口悟史・内田香奈子  
(2018). 他律的(随伴性)セルフ・エスティームの概  
念と測定法 鳴門教育大学研究紀要, 33, 1 - 15.
- 山崎勝之・横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子(印刷中).  
自律的ならびに他律的セルフ・エスティーム潜在連合  
テストにおける刺激語の構成 鳴門教育大学研究紀要,  
34.
- 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子(2017). 「セルフ・エ  
スティーム」の概念と測定法の再構築ーセルフ・エス  
ティーム研究刷新への黎明ー 鳴門教育大学研究紀要,  
32, 1 - 19.
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之(2017).  
児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発ー信頼  
性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童  
評定を用いた妥当性の検討ー 教育実践学論集, 18, 1  
- 13.
- 横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之(2018).  
ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心(自信)の育  
成」プログラムの効果ー児童用紙筆版セルフ・エス  
ティーム潜在連合テストを用いた教育効果の検討ー  
学校保健研究, 60, 5 - 17.
- 横嶋敬行・大上遊路・賀屋育子・山崎勝之(投稿中). 児  
童用のタブレットPC版セルフ・エスティーム潜在連合  
テストの開発
- 横嶋敬行・大上遊路・山崎勝之(2018). タブレット版  
の児童用セルフ・エスティーム(SE)潜在連合テスト  
の開発ー適応的なSEをクラス集団で測定するための  
予備研究ー 日本教育心理学会第60回総会論文集  
p.171.
- Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and  
explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-  
esteem instability. *Journal of Personality*, 74, 119-144.
- Zeigler-Hill, V. (2013). The importance of self-esteem. In V.  
Zeigler-Hill (Ed.), *Self-esteem* (pp.1-20). New York:  
Psychology Press.